

## 赤ちゃん みくに幼稚園（千葉県柏市）

### 事例1 赤ちゃんのお世話<疑似体験>

<東京都江東区にある施設「キッズニア」に親子で出かけ、科学する心が育くまれる様々な仕事を体験した中の“赤ちゃんのお世話をするコーナー”での事例>

恐る恐る赤ちゃんの人形を抱っこしたりオムツを替えたり、ミルクをあげたりする活動を、女の子だけではなく男の子も真剣な眼差しで行っている姿があった。保育者は「みんなもこうして育ててきたのだよ」などと声をかけたが、弟妹がない子どもたちにとっては赤ちゃんの存在がとても新鮮だったようで、感激で興奮した様子で戻ってきた。「赤ちゃんのお世話をしたよ」「おっぱいをあげたよ」「オムツを替えるのが面白かった」などと、その感動を口々に報告した。



この姿は、保育者にとっては予想外であった。ごっこ遊びで赤ちゃんの世話をするだけではなく、子どもたちは本当に赤ちゃんのことを知りたがっているのだと思える。

「そおとね」「赤ちゃんがびっくりしないように、やさしくね」「気持ちが良くなるようにオムツを替えてね」という状況に、傍若無人に走り回っていた子どもたちが真剣に取り組んでいる姿であった。その様子から、赤ちゃんの抱き方やオムツの替え方を教わり、赤ちゃんとかかわる疑似体験ではあるが真剣に取り組む体験を通して、生命の大切さも学んでいた。

保育でも、興味・好奇心と共に責任感をもたせることの大切さを再確認した。また、ただ体験させるだけではなく、目的やねらいをもった活動の重要さも学んだ。



### 事例2 実際に赤ちゃんを知ろう <4歳児>

事例1を通して、「みんなにも同じような感動を味わってもらいたい」という保育者の思いが強くなり、4歳児たちが実際の赤ちゃんを身近に感じる活動をしたと考えた。そこで、保護者の方に協力を依頼し、生後6ヶ月の赤ちゃんのいるお母さんと赤ちゃんに先生になってもらい、話をしてもらう機会を設けた。

お腹の中にいるときの様子、産まれた時の話、育てるときの苦労、授乳やおしめの交換などを目の前で見ながらの活動に皆感動していた。

丈夫な身体には好き嫌いをしないで何でも食べること、規則正しい生活、歯磨きなどの習慣化などのことも話しながら、有意義な時間を過ごすことができた。（その日はどの家庭でも、赤ちゃんが欲しいと親がせがまれた）

その後も1週間の間、毎日のように赤ちゃんとお母さんには幼稚園に来てもらい、いつでもその姿や存在を子どもたちに理解してもらえるようにした。



オムツを替える姿に感動して

#### 各家庭でも親子の話し合いを

こうして子どもたちは小さな赤ちゃんを育てる大変さ、命あるものを守ってあげる必要さも感じ取った。そこで、各家庭でも子どもたちの誕生から成長について話をしたいということを頼んだ。写真やビデオを見ながら家庭内で話し合いをすることによって、家族で命の大切さを感じ取ってもらうことにつながった。

この活動は保護者の協力無くしてはできない活動であった。親子で向き合って自分の誕生から今までを話す機会があって、そのことを次の日、「僕は...グラムだった」「私は...グラム」...の病院で産まれたんだって」「初めてしゃべったことが...だって。おかしいの」などと、幼稚園でみんな興奮気味に話し合っていた。

### 事例3 うさぎの名前

事例2のすぐ後、子どもたちの間でウサギの赤ちゃんに名前を付けたいとの話が自然発生的に出てきた。

子どもたちは幼稚園で飼育しているウサギに赤ちゃんが生まれたことは知っていたが、親ウサギを刺激しないように飼育小屋の外から遠巻きに見ていた。ウサギの赤ちゃんが育ててきた時期に、事例2の体験をしたことで、より興味関心が芽生えてきたと思われる。

穴を掘って、わらを口いっぱい集めて巣作りをして、母親が自分の毛をむしってベッドを作っている姿を見ていたこともあり、ただ餌をあげるのではなく、育てるということにも心が向かっていた。

<何をするのが良いのか、考える>

産後には野菜だけではなくパンをあげるとおっぱいが出やすくなることや、おっぱいが出るためには水分の補給が必要などということ、絵本で調べたりペット屋さんに聞いたりして、情報交換をしていた。

家に帰った子どもたちが家庭で話し、買い物の途中でペットショップに親子で立ち寄って育て方を聞いて来るなど、積極的に活動する姿が見られるようになった。

全クラスを5歳児たちが回りウサギの赤ちゃんの名前を募集する活動が、子どもたちから起こった。自分ひとりではなく、みんなの意見を聞くということができるようになってきた。「…ちゃんの名前が一番良いみたい」「…組の…という名前が素敵」等々、喜びをみんなで分かち合っていた。

子どもたちの発案で、5歳児と保育者が一緒になって看板作りをした。

心が動かされ、活動がどんどん深まっていくのが分かった。



(朝の楽しみ) 登園したらウサギに餌を



素敵な看板  
ができた

### みどころ

園外保育で子どもたちが赤ちゃんとかわる疑似体験をしている姿から、保育者は子どもたちの「赤ちゃんのことを知りたい」という思いをキャッチしています。そしてその思いを受け止め、子どもたちの大きな学びを期待して、「本当のお母さんと赤ちゃんが先生になる」という設定をしました。このどちらの環境も、日常の保育の場面では得られない貴重な体験の場になっています。こうした体験が、実際の保育の環境の「ウサギの赤ちゃん」への思いにつながりました。保育者が子どもたちの言葉にならない思いや欲求をキャッチして、それに応える環境を作ることで、子どもたちの意欲的な体験や自発的な取り組みに結び付いたのです。